

第12回 市民参加懇談会コアメンバー会議  
－市民参加による政策検討会議－  
議事録

1. 日 時：平成15年7月25日（金） 15：00～17：00
2. 場 所：虎の門三井ビル2階原子力安全委員会 第1、2会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、小川委員、小沢委員、高木委員、  
中村委員、松田委員、吉岡委員、新井委員（任命手続き中）  
（原子力委員会）竹内委員  
（内 閣 府）後藤企画官、犬塚参事官補佐
4. 議 題：（1）「市民参加懇談会 in 敦賀」の開催結果について  
（2）次回の市民参加懇談会の開催について  
（3）その他
5. 配布資料  
資料市懇第12-1号 「市民参加懇談会 in 敦賀」の概要  
「市民参加懇談会 in 敦賀」アンケート結果  
「市民参加懇談会 in 敦賀」議事録  
資料市懇第12-2号 次回の市民参加懇談会の開催候補地について  
資料市懇第12-3号 第11回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録

6. 審議事項

○事務局より、新コアメンバーとして新井委員、岡本委員、蟹瀬委員、東嶋委員に参画していただく予定であり、手続き中である旨紹介した。

（1）「市民参加懇談会 in 敦賀」の開催結果について

○事務局より、資料市懇第12-1号について説明。また、「市民参加懇談会 in 敦賀」に対して、本日欠席した森島座長代理、井上委員及び吉川委員からのメッセージを以下のとおり紹介した。

（森島原子力委員からの意見、感想）

当日、会場に参加した感想としては、市民懇の運営はある程度軌道に乗ってきたという感じであった。まだ対話というところまでは行っていないが、質疑応答など、関係機関のサポートもあってかみ合ったやりとりが多かったと思う。市民懇は、メンバーの努力によって、外部で高い評価を受けているが、まだその内容に対してというよりも、その開催自体について、評価されているというところであると思う。真価が問われるのは、今後、その内容についてではないか。

また、開催頻度については、広聴という観点からは、2～3カ月に1回程度は開催すべきではないか。開催地に合わせたテーマを検討し、将来計画を練っていくことが重要だと思う。

（井上委員からの意見、感想）

第2部の司会を松田委員と一緒にいった。松田委員は大変すばらしい司会をしてくれた。個人的な反省として、第2部の司会で1分半という時間制限を当初設けたが、3分の方が

よいのか、最初に時間制限についてお断りするのと途中で断りするのとどちらかよいのか、制限をつけない方がいいのか、限られた時間の中でなるべく多くの方のご意見を伺うためにどうしたらいいのかというところが反省点であり、どうしたら良いだろうかという気持ちが残った。

懇談会の後、パネリストの平山氏の知り合いの方と話した際に、その方は原子力を推進するような教育等に関する質問を持って来られたようだが、話の流れから発言するタイミングがなかったと伺い、用意してもらって伺えなかったご意見があったことが残念だった。

細かいテーマについて、分科会という形で3つぐらいに分けて小規模でやり、それぞれの結果をコアメンバー会議に持ち寄る等、工夫があってもよいと思った。

(吉川委員からの意見、感想)

当日参加はできず、ビデオを拝見した。ビデオで見ると、コメンテーターの方の話す速度が若干早過ぎるように感じた。

全体としてでございますが、情報が提供されれば原子力に対する理解が促進されるということよりも、価値観の差異というところが、むしろその論争を引き起こしているのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ 本日まで出席の方から、当日いらした方のご意見を伺っていききたい。また、ご欠席だった方も、ビデオをご覧になってのご感想をお持ちかと思う。
- ・ まずは、当日参加していただいた方々のご意見を、反省を込めて伺わせていただきたいと思う。

(吉岡委員)

- ・ 反省をやや強調して言うと、2つの問題があったと思う。1つは、第1部についてだが、3人のパネリストをお招きしてディスカッションをしていただいたが、何か退屈であったという印象がある。その理由は明らかである。それは、同じような考えの方を3人集めたというのが基本的な理由だと思う。昨年11月の、東京電力の不正問題が起こった直後に開かれた市民参加懇談会は、第1部がおもしろかったと思う。それは、田岡氏が、割合過激な表現も使って挑発されたのがよかったし、主婦連の清水氏もかなりクリティカル（批判的）な意見をお持ちだったので、議論が成立し得たと思うが、今回は、最初から合意が成立していたような感じで、聞く側としてはさほど発見や驚きというのは少なかったと思う。
- ・ アンケート結果において、長かったというコメントが多いのは、第1部が長かったという印象ではないのだろうかと思う。個別のコメントを見ても、5～6人はそういうことを言われているので、第1部そのものを考え直す方がよいと思う。対策の1つは、メンバーを換えるということで、批判的な意見の者も積極的に登用して、論争が起こるような形で組織するというのが1つの方法だと思う。もう一つの方法は、思い切って「座談会」をやめるという形式で試みることである。その場合には、我々専門委員がそれぞれ挑発をするというか、会場の参加者に対して挑発をする。それを第1部で行ったあとで、第2部は参加者の方から応答していただくというような形でやれば、より双方向的なものになるのではないかと思った。第1部というのは、東京での成功は認めるが、今回はうまくいかなかったと思う。

(木元座長)

- ・「座談会」というのは、第1部のパネルディスカッションという意味か。

(吉岡委員)

- ・ そうである。
- ・ 第2部は、それなりに盛り上がってよかったと思う。

(木元座長)

- ・ では、最初から第2部形式でやるということか。それとも、第1部のパネリストを工夫しなければいけないということか。

(吉岡委員)

- ・ パネリストを工夫するか、あるいは我々コアメンバーが表に立って、こう思うがあなたはどうか、と参加者に問いかけるという形式が考えられる。

(木元座長)

- ・ コアメンバーがパネリストになるということか。

(吉岡委員)

- ・ パネリストは置かず、各委員が比較的長く、それぞれ5～6分ずつ発言して、後半はそれを考慮した上でフロアからいろいろなリアクションをいただくという形も考えられるのではないかと思います。
- ・ 第2点としては、非常に強く感じたのだが、今回「関係者」として呼び出した方々の中に官庁の方がいたと思うが、第2部でしきりに説明会のような応答の仕方をしていった。つまり、「これが問題だ」とフロアから参加者が意見を言うと、それに対していちいち答えようとされていた。しかし、答えるのは我々のはずだと思う。我々はそれぞれ独自のフィルターを持っており、フロアの一般参加者のご意見の中で聞くべき意見だけをしっかりと聞いて、それに対してリアクションをするのは我々の役割であって、役所の方が、役所の観点とは異なるような意見がフロアから出た場合に逐一反論するという場ではないと思う。我々が独自のフィルターを持っていて、それに見合う意見を受けてまた我々が応答するという場であり、どうしても必要な場合には役所の方が出ていただいてよろしいが、それ以外の場合は黙っていただいていた方がよろしいのではないかと思います。官庁の方々が出過ぎたのではないかという気がする。

(木元座長)

- ・ 例えば、フロアから質問、疑問が出た場合は、吉岡委員のご意見だと、こちら側が一旦受けとめてから、「今の件、ちょっと分からないが文科省はどうですか」、こういうルートをとった方がよろしいということか。

(吉岡委員)

- ・ 必要に応じて、そうすべきだと思う。必要でない場合が多々あったように思う。安全性についての個別の論点などに対しては、我々は聞く耳を持たないというか、聞く必要もないことだし、役所の方の応答で時間を使うというのは、非常にもったいない面がある。

(木元座長)

- ・ そこは、またいろいろご意見があると思う。

(吉岡委員)

- ・ しかも、我々委員を軽んじるようなところが若干あった。例えば、私が「電源三法というのは廃止の方向で考えるべきで、もし電気料金から税金を徴収するなら安全規制

の方に回せばよろしい」ということを言ったのに対して、資源エネルギー庁の方が、「電源三法はこれからも地域振興のために充実していきます。その点間違えないようにしてください」と念を押す場面があった。これは若干筋が違うのではないだろうか。資源エネルギー庁が今そういう方針になっていることは重々承知の上で、その方針が妥当かどうかを検討するのが委員の仕事であると思う。したがって、そういう問題提起をしているのに対して、委員の意見をも否定するような発言をされるというのは、非常に失礼な話だと思う。

(木元座長)

- ・ そういう場合どうするかということも、今後の検討に含めたいと思う。司会が大変になるかもしれないが、そういうときに「それは、違う」と吉岡委員が手を挙げ、発言されても良いことにするといった方法があると思う。

(松田委員)

- ・ 初めて原子力関係の司会をして、皆さんに助けていただいて、中村委員にもサポートしていただいて、どうもありがとうございました。
- ・ やはり勉強になった。というのは、最近、文科省の原子力研究開発の予算の評価をする委員になったが、原子力に対する予算がものすごくついていることを初めて知った。そこから考えると、あの敦賀の会場からの意見というものが、余りにも幼過ぎるというか、国民が知らな過ぎるという、このギャップをどうやって埋めていけばいいのかと思う。国民がどういう判断をしようと、その政策の予算はどんどんついていて、動いていっている。でも、私たちはまだ、原子力に賛成か反対かというようなところでしか議論をしていない。これは、もう少し我々国民も、会話の質を、エネルギー政策そのものに対して本気で考えるようなレベルに持っていかなければいけないとつくづく感じた。
- ・ 今後の市民参加懇談会のあり方も含めて、私たちはせっかく委員になったので、今までの体験というものを踏まえて、原子力委員会にもっと本質的な提案をしていかないといけないのではないかと思った。例えば、教育プログラムに対してもっと予算をつけるべきだとか、市民参加懇談会が提案したことが政策の中に位置づけられて初めて、市民参加懇談会の意味もあるのではないかと思う。シンポジウムを開くということも大事だが、各地で開催された市民懇の結果が政策提案され、実現されたというような報告ができるようなコアメンバー会議にしていきたいとつくづく、敦賀に行ってみた。青森では、まだそこまで気づいていなかったが、これは皆さんで考えてみていただきたい。

(木元座長)

- ・ 今、松田委員が最初に言われたことの中で、これだけ予算がついているということは、我々一般国民はよく知らないということがあった。現地は知っていると感じたということか。

(松田委員)

- ・ 知らないと思う。だれも知らない。
- ・ 私は、原子力政策にお金がつくということに反対ではなくて、むしろそれは大切なことだと思っている。ただその予算の使われ方については、もっと国民の意見を求めるべきであり、私たちもどうすればその国の予算をもっと私たちが望む方向で使いこな

すことができるかについて議論を深めていかないといけないのではないかという気がしている。

(木元座長)

- ・ 予算だけで、4時間たっぷり使えそうである。

(松田委員)

- ・ そう思う。そういう話も、やはり具体的なデータを伝えて、それに対して国民がどういう要望を持っているのかということを見ていかなければと思う。

(木元座長)

- ・ 伝えると言われたが、現状がこうなっているというデータだけをお示しして、討議をいただく場があって良いということか。

(松田委員)

- ・ そうである。

(中村委員)

- ・ 開催の反省という、ほとんど吉岡委員と同意見だが、第1部についてはやはりパネリストの人選が挙げられる。大分危惧はあったわけだが、結果的にはちょっとつらかった。進行するのに苦労した。パネリストの皆さんが、ほとんど同じペースの内容なので、パネルディスカッションにはなかなかできなかったというのが反省点である。ただ、ではどうするかということについては、人選を考えることで活性化はまだできると思うので、吉岡委員の後段のご提案については、まだ検討の余地があるとは思っている。
- ・ パネルディスカッションのかみ合いが少し足りなかったので、第1部の1時間45分というのが長く感じたというアンケート結果があるのだと思う。青森のときや東京の2回目のときは、同じ時間を使っても、全然時間が足りないぐらいだという印象を皆さん持っていたので、これは内容が原因かと思う。
- ・ 第2部についても、非常に吉岡委員と近い意見だが、これは司会の方を批判するわけではないのだが、関係者に答えさせるスタイルを最初にとってしまったのが間違いだった。やはり司会者か、我々コアメンバーの方が主導権を持って、必要と思われるときだけ発言を促すという形にすべきだった。「はい、どうぞ」と言って立たせてしまったのが、失敗だったと思う。

(松田委員)

- ・ 待ってくださいと言えば良かったと思う。

(中村委員)

- ・ 会場から質問めいた話になると、各部署が全部答えるというスタイルになってしまい、最後、サイクル機構や関西電力といった事業者まで発言するとなると、参加された方は少し違う性質のものに感じられたかもしれない。
- ・ 関係者の席については、検討の上、壇上でなくフロア側に座ってもらったわけだが、逆に挙手してどんどん発言する形になってしまったことを考えると、一考の余地ありだった。

(木元座長)

- ・ 1つ、少しお伺いさせていただきたいのは、サイクル機構の役員級の方で、特に関係者席にお呼びしなかった方が、「私は敦賀に住んでいる核燃サイクル機構の…」と言

われた件があった。一市民として発言なされたわけだが、市民懇として問題ない発言だったかどうか。

(中村委員)

- ・ 私は問題があると感じた。それは、例えば青森県六ヶ所村で、日本原燃の社長が発言するのと同じことである。すなわち、あの場で一般市民だとわざわざ言って手を挙げなくても、事業者として意見を言う機会は幾らでもあるはずだと思う。

(木元座長)

- ・ にもかかわらず、事業者の立場でおっしゃったということか。

(中村委員)

- ・ そうである。発言の内容は事業者の内容で、市民の内容ではなかったように思った。

(木元座長)

- ・ そのあたりを含めて、いろいろな問題が今度は提示されたなという気がする。

(中村委員)

- ・ 一番困るのは、我々コアメンバー、あるいは市民参加懇談会が、関係省庁、関係事業者のああいう発言を許している会であると理解されてしまうことである。結果としてあんなにすぎないので、それはテクニカルに、今後カバーはできると思うが、敦賀だっただけに余計に、ああいう発言によって、原子力委員会が関係省庁を引き連れて説明会をしに来たのではないかという受け取り方をしてしまったのではないかと思う。だから、コアメンバーが幾らニュートラルというか、皆さんの声を受け入れますよ、聞きますよという姿勢で参加していても、あの関係省庁は余計な説明者になってしまった。そのところが、反省点だった。

(木元座長)

- ・ 今回は「原子力と地域社会～原子力が地域にもたらすプラスとマイナスを考える～」というテーマで、安全性についての具体的な討論がテーマではなかった。だから、松田委員は第2部の司会として何度も引き戻す試みをなさっていたが、一部の方々から、「もんじゅ」の裁判のことであるとか、その存在そのものを問うという形になってきて、その存在によってこんなマイナス面があるというように具体的なマイナスが先に出ないで、「もんじゅ」の存在自体の否定で論議されて、「もんじゅ」の具体的あるいは技術的なことを、スタンバイしていた当事者の方々がお答えになったという形式になった。印象として、質問があったらそれを説明するという雰囲気になってしまった。そのために、こちらが想定した原子力と地域との共生という方向でなく、もっと身近な現実の問題に終始していくことになってしまった感はあったと思う。ご批判というか、いつもやっていることの流れ、というような感じ・印象を受けた方が、アンケートの中にも多い。難しいと思った。

(中村委員)

- ・ 若干はっきり言わせていただくと、関係者の皆さんの参加するときの姿勢と意識の問題だと思う。あの場をうまく使って説明しようという意図が露骨に感じられた。それは、我々にとっても非常にマイナスポイントである。参加された方にとっても、それは疎ましく感じられたのではないか。あの部分は不要だと感じたのではないだろうか。会場の方々からの発言の趣旨としては、必ずしもエネ庁や保安院にあの場で答えて欲しいというものではなかったと思う。それにすべて答えていく、あるいは反論し

ていくという結果になってしまったから、方法論の問題として、そういうやり方というのはやはりよくない。

- ・あとは、どこでもいつでも中村が司会で登場するというご発言が、気になっている。

(木元座長)

- ・了解した。
- ・今日の座席の順番で伺っているが、竹内原子力委員が中村委員のお隣にいらっしゃるの、ご参加なさいましたからお一言、ご感想をいただきたい。

(竹内原子力委員)

- ・私は過去の市民懇から参加しているが、昨年11月の東京開催と今年3月の青森開催の場合と、今回の場合ではテーマがかなり違った。というのは、東京開催の時は東電の不正記載問題、青森開催の時はプール漏洩問題があり、市民の皆さん方が知りたい情報は届いていますかという切り口だった。したがって、事業者なり当事者は、説明を求められて当然と見られた。ところが、敦賀の場合には、原子力がもたらす地域の光と影、プラスとマイナスというテーマが、一般の方から見ると広過ぎた。そのため議論も、第2部で良い議論がたくさん出たと私は感じているが、その議論が次に続いていかなかった。教育の問題や、東海と比べると原子力関係の地場産業の発展の仕方が、まだまだ敦賀は遅れていて多面的ではないという意見等がその例である。良い発言はたくさん出ていたと思う。そういう発言が出たときに、それを発展させたらどうかと思った。司会の方は、大変だったと思うが。
- ・そういう面で、これまでの開催では比較的、問題が出てきたときに司会はどうさばくかということは、横で聞いていても問題なさそうだったが、今回は本当に第1部も第2部も、皆さん大変だったのではないかと思った。

(中村委員)

- ・特に、第2部は難しかったと思う。

(竹内原子力委員)

- ・そう思う。第2部については、私も、特に後半は同じ意見を持っていまして、出た意見全てに対して、関係省庁なり関係者が、「それはそうではないですよ」と説明してしまうというのは、私は趣旨と違うのではないかと思った。今、今日の資料のアンケート結果を斜め読みしたら、そういう意見もたくさん出ているので、今後は、懇談会の主役は参加した地元の市民の皆さん方だという会にした方が良い。

(木元座長)

- ・「第2部はあなたが主役です」と謳っているのだが、どうしても質問する人は、いつも見なれた人になってしまうという地元のご意見がアンケートにもある。だから発言しにくかったのかもしれない。今日はこれを言うぞと、テーマに関係ないことでも質問が出てくるような方向も若干あったので、そこは反省材料だと思う。

(竹内原子力委員)

- ・特に、中村委員が司会されていた第1部の方は、やはりご意見が揃い過ぎていたかもしれない。お三方とも非常にいいプレゼンテーションをされたと思うが、少し盛り上がるようなことが第1部にあった方が、後の司会も楽なのではないかと思う。良いお話だったのだが。

(中村委員)

- ・あまり、とがってぶつかるところがなかった。

(木元座長)

- ・橋詰氏は論説委員として賛成・反対を踏まえながら発言なさっていた。そのため少し迫力に欠ける部分があったかもしれない。もう少し過激な感じのご発言が出ることも期待していたが、出にくいという感じもあった。
- ・平山氏のご発言も、具体的な本音が見えないというところがあったように思う。

(竹内原子力委員)

- ・アンケート結果を見ると、割合長い時間を感じたという人も結構いるが、その辺りが原因ではないかと思う。
- ・第2部は、やはり関係省庁が出て説得するような説明をしてしまったため、印象は悪いと思う。

(松田委員)

- ・私が思うのは、関係省庁の方たちも場なれしていないので、自由に意見を交換するときの自分の出方という訓練がまだ不十分で、いつも何か市民の前に行くときと弁明しなければいけないというような訓練しかされていなかったということはないだろうか。そういう意味では、私は皆さんよりももう少し広い心を持って見ており、いろいろな意味でトライしていきながら経験を積み重ねていって、関係省庁の方たちも今後広がっていく点なので、あれはあれで良かったのだと考えている。むしろ関係省庁が来てくださったことで、コアメンバーの方全体の意気込みだとか気持ちも伝わっていったらうから、参加してきて、そしてそこで自分も参加したという中で、その反省を踏まえたものをまた私たちが伝えることによって、次回からまたいろいろと工夫してくださるだろうから、良いと思った。考えが甘いだろうか。

(中村委員)

- ・甘いと思う。心が広過ぎるだろう。

(木元座長)

- ・こちら側がご参加をお願いした趣旨を、どの程度理解してくださったかによるのだろうと思うので、こちらの説明不足もあると思う。それは、多いに反省する。ご意見に感謝したい。

(中村委員)

- ・主導権を、市民参加懇談会あるいはコアメンバーが握っているということが確認できれば、松田委員のように広い心で学習効果が上がるのを待っても良いが、主導権の問題だけは、はっきりしないといけないと思う。

(木元座長)

- ・高木委員、小沢委員、後でご意見伺った方がよろしいか、席順で今伺った方がよろしいか。

(小沢委員)

- ・私は、別に何も無い。

(高木委員)

- ・今聞いていて思ったのは、先ほど松田委員が、予算がこんなに出ているのを委員になって初めて知ったということをおっしゃっていたが、松田委員が委員になって初めてこれだけ予算があることを知ったという情報を市民が知るわけがない。その議論のレ



ベルが低いとか、そういうのはちょっと言い過ぎという気がする。

- ・ 元々こういうのは、例えば住民投票などでも負けている。ということは反対意見が強いということである。そのレベルを超えて予算の使い方という、そこまでは行っていないと思う。議論としては反対意見がすごく強いからだ。
- ・ 住民投票にしても何で負けているのかという、そこを探りたいと、ある意味ではそういうことだろう。

(木元座長)

- ・ 住民投票というのは、例えば刈羽の場合を指しているのか。敦賀では行われていない。刈羽で言うと五十数%がMOX燃料を送荷するのをノーだと言った。四十数%はイエスだと言った。その分析のようなことをするということか。

(高木委員)

- ・ そういう地域で意見を聞いて、なぜそこまでノーが多いのかとか、そういうことを人から聞いて探る——探るという言い方は良くないが、——なぜそういう意見が強いのかということを懇談をしながら知っていくということが我々の目的だと私は思う。反対という意見は出てきて当然だし、なぜ反対なのかというところを見ていくことがこういう専門部会をやっている大きな目的なのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ そうである。そういうところが一番のポイントである。そうすると、テーマを絞って、例えば、住民投票の結果を考えると、何かテーマを一つのポイントに絞ったところから入っていく方がやりやすいかもしれない。

(高木委員)

- ・ あるいは、例えば先ほど地場産業という話が出てきたので、地場産業というところから考えて、そういうもので地元を盛り上げていきたいのか、そうではなくて反対として貫いていきたいのか、その差は何なのかとか、そういう話は幾らでもできるような気がする。話の持っていく方を、なぜ反対するのか、なぜ地場産業をやりたいのか、それともそうではなくて反対という方を貫いていきたいのかとか、その意識の差、ズレ、そこら辺を探っていくというか、そういうことを議論の中心にしていく方が、何か得るものがあるのではないかと、聞いていてそういう感じがした。

(木元座長)

- ・ 敦賀開催を検討した当初、冒頭の座長報告で、敦賀で原子力発電所が増えた結果によって人口がふえたのか、産業がどうなったのか、それから道路はどうなったのかということも入れようかということも申し上げたが、結局それはやめようということになって、何年何月に何がどうしたという事実をあげるだけで終わった。今高木委員が言われたようなことだと、もしかしたら、データをこちらが用意して報告したら良かったかもしれない。

(高木委員)

- ・ 例えば、道路を作ったと言っても、別に大して要らない道路を、予算が入ったから作ったとか、そういう意見もあるかもしれない。それは本当に使い方として良かったのかとか、そんな使い方ではないものをやってもらえば、もっと賛成できたとか、いろいろなことが地元の意見としてあると思う。

(木元座長)

- ・ 陸の孤島で、それまで学校へ行くのが大変だったのが、道路ができたので、通えるようになったというご意見があれば、一方で風光明媚なところが壊れたという意見もある。

(高木委員)

- ・ そういう割と小さなことだと思うが、そういうところから探っていかないと、結局はなぜ反対しているかが分かってこないと思う。私は何かもうちょっとそういうこだわりを持ってやった方が良いのではないかという気はした。

(小川委員)

- ・ 私は「i n敦賀」には出席できなくて、ビデオテープを1時間ほど拝見したのと、今回事業者として私の会社の人間が随分関わっていたので、会社の側から見た意見も聞く立場だった。
- ・ 感想としては、先ほど松田委員が、予算がこんなに使われていて、地域の人々がそれを知らないで、議論をされているというようなご意見だったが、私はテープを見て、敦賀だから結構レベルが高いことを言っていると、むしろそう思った。通常、一般の市民の女性ですとか学生さんとの間で話し合っている身としては、今回の市民参加懇談会で出た市民の方の意見は、かなり勉強していて、完璧ではないにしても結構自分の意見をまとめて言っていたと思います。むしろ青森、それからほかの地域で聞かれた一般市民の意見よりは長い間原子力と共生してやってきた土地ならではの意見だったと私は思った。
- ・ 市民の方々の意見については、そういう感想を持ったが、先ほどから議論に出ていた経済産業省や文部科学省の方々、それから事業者の方々は、今回に限っては不要だったのではないかと思う。特に事業者は、技術的な難しい問題がそこで糾弾されるというようなテーマではなかったのか、かえって中村委員が言われたように、原子力委員会の市民参加懇談会として、事業者を呼んだことがイメージダウンだったかもしれないし、事業者としてみればその立場上、出てくれば、もし一般の市民の方々が誤解しているということがあれば、PRとして話したくなるのは当然だと思うので、それがまずかったということではなく、これは企画した我々が悪いのであって、出てきた意見が言い過ぎだったといっても、その方々の立場としたら当然言いたいことであろうから、それを後から言うのは酷だと思う。そういうことなら、呼びしめない方が礼儀に適っていると思う。

(木元座長)

- ・ 誤解があった場合にはと言われたが、ご意見の中に明らかに誤解している部分があった場合の事実確認というか、正確な情報というのは私は出す必要があると思っているが、そういう場合はどうしたら良いと思うか。

(小川委員)

- ・ すぐに事業者から情報を出さなくても良いのではないかと思う。大きな誤解だったら、コアメンバーの中で大体は分かるのではないか。細かいことまではコアメンバーでは分からないだろうから、「確認します」ということでも良いと思う。

(木元座長)

- ・ 誤解があった場合には、コアメンバーが正確な情報をわかる限りお伝えして、またお話し合いを続けて、そして細かいことになった場合には、バックアップの助っ人の方

に頼むということか。

(小川委員)

- ・ 必ずしも助っ人の方でなくて、後日でも良いと思う。

(木元座長)

- ・ そういった形式については、テーマも違えば場所も違う。場合によって形も変わってくると思う。

(小川委員)

- ・ そう思う。青森のときのプール漏水問題の場合等は、技術的な問題が出てくるのが十分予想されたから、そのときに事業者が出るのは良いと思うが、今回のテーマの場合は要らなかったと思う。

(木元座長)

- ・ 事前のコアメンバー会議での議論では、敦賀に行った場合には地域にとってのプラスマイナスという大変大きいテーマはあっても、現場は現場で「もんじゅ」があり、いろいろな事故もあった、ということは頭にあるだろうから、どんなことがご意見・ご質問に出ても、一応お話し合いができる体制は整えようという議論があった。そうして、当事者もお見えになった、関係者がお見えになったというわけだが、これについても毎回、コアメンバー会議でじっくり考えていって、やっていこうということで良いと思っている。今回は結果としてやり過ぎたことになったかもしれないが。

(小川委員)

- ・ 市民参加懇談会の立場とか、それから知識も含めて、できるところまで努力するということでよろしいのではないかと思う。

(碧海委員)

- ・ この「原子力が地域にもたらすプラスとマイナスを考える」というテーマはこれからもやりたいと思う。でも、今回の敦賀はこのテーマという意味では私は失敗だったというか、余り成功してないと思っている。
- ・ 一つは第1部の方の中村委員も苦労されたと思うが、生活上の話が相当出てこない、このテーマは余りおもしろくないし、展開しないと思う。そういう意味で、パネリストの平山氏のお立場というのは、そういう発言をされる立場ではなかったような気がする。したがって、もう1人女性に出ていただいてもよかったと思っているが、できれば地域の――例えば歴史とか風土とか県民性からすると、福井県の中でも嶺北と嶺南では違うらしいので――地域性みたいなことについて相当発言をできる方、それとの関連で生活上のプラスとマイナスとか、そういったことに触れられるようなパネリストが特に女性で、欲しかったと思う。
- ・ 橋詰氏はマスコミ人として当然そういう材料はいろいろ持っていらっしゃるわけだから、ある程度橋詰さんにその辺をカバーしていただければと思ったが、暮らしの話があまり出てこなかった。教育の話は若干出たが、暮らしの話があまり出てこなかったのが非常に残念だったという気がしている。
- ・ 後半はそれこそテーマからすぐ外れてしまった。もっとこのテーマでやりたかったなと最後までずっと感じていたが、これは敦賀でやると決めたときから私は気になっていたことで、今の時点で果たしてこのテーマで敦賀でやれるのかなというのは少し心配だったことなので、その危惧が多少あらわれたかなという気がした。しかし、このア

ンケート結果を読んで、自由記述の部分を読んだら、参加者はむしろこのテーマとの関係で見えてくれたのかなと思い、かえってほっとした。

- ・ 結局、地域にもたらすプラスとマイナスを幅広く、あるいは深くとらえて、原子力に対する反対、賛成といったようなことを論じられなければ、結局ただ安全なら安全の問題だけで原子力を論じるという形だったら、どこでも絶えず行われているわけだが、どこまでいってもそれだと――私の誤解かもしれないが、先ほど高木委員も、私が感じているようなことと同じような意味で言われたのではないかと思う――本当の気持ちというか、そこに住んでいる人たちの考え方とかというのはつかめないかなという気がしている。その辺が少し残念だった。

(木元座長)

- ・ 「地域にもたらすプラスとマイナス」というのは、言い方としてはそれぞれがとらえる感触が違うではないかという気もするし、プラスとマイナスという非常に直截的な言い方をしてしまっているので、そのテーマに対して参加なさった方も期待値がそれぞれがずれているというか、違っていたという思いはあるだろう。

(碧海委員)

- ・ 第2部はどうしても挙手をした人を結局指さなければならないという、それを優先させるという形になっているが、テーマとの関連を絶えず強調して、関連がなければ席に引き戻して、こちらから引っ張り出してでも、このテーマとの関連で発言して下さるような方に発言してもらおうという手法を使ってもいいのかなというのが一つ感じたことである。
- ・ 井上委員のご意見にあった発言時間の問題だが、なるべく大勢の人に発言してもらいたいのなら、とにかくそのくらいの感じでしゃべってくださいと、あくまでも最初に要望をするのが良いと思う。この市民参加懇談会の場合には、3分たったら切りますと、そういうことではないと思う。それが1分半であつたらいいのか、2分であつたら良いということではなくて、全体としてそういうルールをなるべくみんなに守ってもらうという進め方を、気をつけていくということで良いと思う。

(木元座長)

- ・ 私も同じ意見を持っているが、会場の方から、自分たちばかり短く時間制限されていて、答える方は長いではないかというような意見もあった。そういう意見をどう整理するかというのは今後の問題だと思う。
- ・ 今回のプラスとマイナスというのは碧海委員が最初にご提案なさったと思うが、私は碧海委員の意図はもっと深いところにあったのではないかと今でも思っているが、その辺はいかがか。

(碧海委員)

- ・ 深いところというのか、私はそんなに複雑に考えているわけではなくて、もっと生活上の実感として、本当に原子力発電所というのはどうなのかということをもっと知りたいということである。

(木元座長)

- ・ それがなかなか今回は出にくかったというか、どうしても目先の現実問題に引きずられていく質問が多かった。

(碧海委員)

- ・ もちろん反対の立場で原子力は怖いから嫌だでも良いし、それから生活は決してよくなってない、こういう部分が悪くなった、ということをもっと言ってくださるような女性とか、そういう方がもっともってくださったら良かったと思う。

(中村委員)

- ・ それは少し思い込みではないか。

(碧海委員)

- ・ 思い込みというのは、そう思っている人がいるだろうということが、ということか。

(中村委員)

- ・ そういう意見が欲しいというのが思い込みだろう。普通だと、もっと反対派の人たちがとにかく主導権を握って、テーマとは関係なしにどんどん、どんどん意見を言っていくという例が多いが、この議事録をご覧になっても分かるように、推進とか賛成というよりも相当建設的な意見が出た。私は、敦賀という地域はそれだけ成熟していると思った。碧海委員に反論するわけではないが、このテーマでは、敦賀開催に危惧を持っていたと言われたが、敦賀だからあそこまで出たのであって、このテーマでやるとしたら、他の地域だったらもっと無理ではないか。

(碧海委員)

- ・ そうは思わない。私はそれほどには感じていない。

(中村委員)

- ・ 例えば、どこなら敦賀よりもっと期待できたか。

(碧海委員)

- ・ 経済産業省があちこちの立地でエネルギープラザというものをずっと開いていた。あのエネルギープラザで女性だけの分科会みたいのが継続的に開かれていて、そこで全国の女性たちが集まって、いろいろ議論を続けた。そこに出てきたような方たちというのが全国の立地にいる。だから例えば島根とかにも、思い浮かぶ女性たちがいらっしゃるし、もちろん今回の敦賀にもいらっしゃるはずだが。

(中村委員)

- ・ 敦賀と島根では、日本のエネルギー政策、原子力政策の中で占めているポジションが全然違う。だから、敦賀には危惧があって、島根なら大丈夫だっただろうというのは、議論にならないと思う。

(碧海委員)

- ・ そうではなくて、敦賀で危惧があったというのはもっと大きな問題があるからである。つまり、実際にそうだったように、例えばもんじゅの話とか、そういう話になってしまうという意味で危惧があったという意味である。

(木元座長)

- ・ 第2部の方で、ある質問なり意見が出る。それに対して我々が答える以前に会場の中から、「ちょっと待ってください」と、会場の中から対論が出てほしいと私は基本的に思っている。だから、それを促すようなことをこれからやっていきたいと思う。議論をコアメンバーに振るなり、コーディネーターに振る以前に、会場の中で今の方に対してお答えなさる方がいらっしゃったらずえひとか、そういうことになれば、会場の中同士で議論する部分が出てくると、見えてくるものがあると思う。
- ・ なぜかという、アンケート結果の感想を読むとそういうものが多い。決まった人だ

け手を挙げてやっているとか、自分はもっとこういうことを考えていたとか、こういうことを言って欲しかったとか。ぜひ会場で発言していただきたいという気持ちがあるので、それを主張したいと今思っている。

- ・何か追加でこの反省についておっしゃりたいことがあればお願いしたい。

(吉岡委員)

- ・青森でもこれはアンケートで書かれていたことだが、第1部が終わった段階でフロアから意見を事前に募集をして、それを司会が見てある程度の筋書きを作っていくというのはいかがか。それならば事前にメモを出していただければ発言の機会はそれなりに得られるチャンスは高いという、そういう仕組みを入れてみたら良いのではないのかという気はする。
- ・フロアの参加者同士で議論をして深めていくというのは、いまだ一回も成り立っていないし、かなり難しい気はする。

(木元座長)

- ・やってみたいとは思う。

(吉岡委員)

- ・やってみたいとは思うが。

(木元座長)

- ・「第2部の主役はあなたです」と謳っているわけだから。

(中村委員)

- ・現実には、それは非常に難しいと思う。成熟度の問題もあるし、ディスカッションとか、ディベートというものに対する基本的な問題もある。難しいと思うが、この市民参加懇談会がそういうものを期待しているのは確かである。その方法論として、吉岡委員の言われる方式というのは確かにあって、あくまでも会場からのご意見で筋書き、粗筋、流れをつくって、当然その意見を出してくれた方に発言の機会を与えて、「さあ、それについてどう思いますか」、「ほかのご意見は」というやり方ができれば、その可能性もある。挙手、挙手で、この挙手した人に対してほかの意見というのは、なかなか進行として難しい。

(木元座長)

- ・アンケート結果を読むと、結構ご意見があったことが伺える。

(中村委員)

- ・この方たちも、何か言いたいことを用意したりして来たのだろう。それが事前にこちらに分かっていれば、「こういうご意見の方がいらっしゃる、どなたですか」と会場に手を挙げてもらい、発言してもらって、それをきっかけとして「こういうご意見だけれども、会場のほかの皆さんどうですか」と、そういうやり方はできる。

(木元座長)

- ・途中で意見をとってという方法は、ほかのところでもやっているが、私も何回かコーディネーターをやって、途中で意見をとるとまとめるのに結構時間がかかってしまう。意見を分類する等、事務方の方も大変だと思う。例えば、事前に市民参加懇談会の広告を出すときに、参加する方にご意見ある方は出してくださいと事前にもらっておいて分類しておき、中間では第1部、第2部の間で「もし意見のある方はお出してください」というようにやるという手法もある。

(中村委員)

- ・ 一番良いのは、事前の申し込みのときにご意見を集めておいて、インターネットでも良いし、お葉書やファックスでも良いから、それである程度コアの部分了我々が持っていて、さらに会場で休憩時間内に受け付け、それをプラスアルファする。そうして大体どういう発言が出てくるかというのが分かれば、それをまずぶつけて、会場からそういうご意見で発表してもらって、「それについてどうですか」というように持っていくのは可能だと思う。

(木元座長)

- ・ そうすれば、会場の中でのやりとりも活発になるだろう。

(中村委員)

- ・ それならばある程度期待できる。

(碧海委員)

- ・ 昨年11月の東京開催のとき、私は第2部の司会で、多少それをやったつもりで、拳手を順番に当ててしまうのではなくて、発言があったら必ずそれに対しての発言を多少求めてやりとりをやって、それからまた次にいくという、そういうやり方はできると思う。
- ・ 吉岡委員の今のご提案だが、普通のシンポジウムで見ていると、それをやると必ず出してもらったものをある程度取り上げなければならないということになって、そうするとお互いに全然関連のない、全く違う、特に質問みたいなものが並んでしまうと、何かそれをただ片づけていくという形になってしまうので、会場内でやりとりをしてもらうということがすごく難しいという気がする。

(中村委員)

- ・ テーマから外れているものは、事前に省いておけば良いと思う。

(碧海委員)

- ・ そういうルールをきちんと言わないと、紙を出したら取り上げられるのだと思われたら申し訳ないから。

(中村委員)

- ・ 普通の、国や事業者がやっている説明会だと誤解して参加される場合があるから、そうではないと、皆さんが意見を言うことがこの会の趣旨なのだとすることを徹底して、ご意見を事前にも寄せていただく、会場でも発表していただくということをもっと徹底すれば良いということだと思う。

(木元座長)

- ・ それはこちらから事前にきちんとご説明するということをしなければならないと思う。
- ・ 反省会ばかりやってられないので、また後ほど何かあればおっしゃっていただきたいと思う。
- ・ 大変お待たせしたが、新井委員が静かに座ってくださっている。先ほどご紹介したが、新しくメンバーに加わっていただいた新井委員に一言お願いしたい。

(新井委員)

- ・ どうも新井と申します。よろしく願いいたします。
- ・ 先週まで新聞記者だったが、今は何をやっていると言って良いか分からないので、どういう立場でこれからお話をすればいいのかと今、戸惑っている最中である。そのう

ち落ち着くと思うので、その節またごあいさつをしたいと思います。今お話を聞いていて思うことは、こういう会議があると、新聞記者は、すぐこの会議は意味がなかったとか、あったとかというふうに片づけて記事にしてしまうのかなと。前回のサミットのように、開催したことに意味があるという会議があつて良いはずであつて、あまり会議自体の意味の有無で片づけない方が良く、長い間やっていくことで意味を生じることがあるはずで、その意味ではあまり悪く言うことも、良く言うこともなく、冷静に判断されるのが一番よろしいのではなかろうかというような印象を持った。

(木元座長)

- ・ ありがとうございます。今後ぜひぜひ続けてご参加いただきたいと思いますし、新井委員は新聞紙上でもそうだが、いろいろなエネルギーに関するご著書もお書きになっていらっしゃるし、大変きついこともおっしゃっているので、ぜひその切り口でお願いしたいと思います。

## (2) 次回の市民参加懇談会の開催について

○事務局より、資料市懇第 12-2 号について説明。

(木元座長)

- ・ 前回までを大枠でまとめさせていただくと、例の停電問題、高木委員の方からもご提案があつて、これが良いのではないかと、東京ではなくて首都圏という範囲内で埼玉とか横浜とかといった意見が一番大きい声だったと思う。そうだとすると、どういうふうな場所を決めた方がよろしいか。
- ・ 停電に関しては今は涼しいから大丈夫そうだという意見もあるし、8月の終わりに猛暑が来るという声もあるし、そうすると開催時期は9月の半ば過ぎでないとできないと思われるので、前回コアメンバー会議では、10月の初旬というのが出ていたと思う。その時期が良いのか、そのあたりからご発言があれば。
- ・ 電力の需要とか供給ということをどう捉えたらいいのかというようなテーマの方が良いのではないかというご意見もあった。「電気とは何か」というテーマも挙がった。どういうテーマで、どこで、いつごろ開催するか、その辺りのご意見をいただければありがたい。

(中村委員)

- ・ まずテーマからだろう。

(高木委員)

- ・ 10月になってからだったら、あまり首都圏でやる意味はないと思う。

(木元座長)

- ・ 停電に関して、とはしないということか。需要の問題はどうか。

(中村委員)

- ・ 需給の問題だろう。結局は、東京電力とか停電問題、節電問題に言及せざるを得ないことになるわけだが、前回コアメンバー会議でも需給という話が出ていた。供給と需要を考えよう、と。

(小川委員)

- ・ 今、原子力発電所がこんなに停まっても何とかやっているとはいえないかという感じで、本当に原子力が要るのかというような疑問を持っている人も多い。だから需要



と供給というテーマで、ホットなときに、9月中旬にさいたま市あたりでどうかと思っている。というのは、敦賀で6月28日に開催したわけだから、10月までではインターバルとして長過ぎるという感じがある。3カ月に1度ぐらいはどこかでやった方が良くはないかという時間的なことと、それから需要と供給の問題で、この夏どういう形になって、9月の時点で何基停まっているか分からないわけだが、本当にこれが正常な首都圏の供給体制なのかという問題を考えると、そういうことでテーマのキャッチコピーをどうするかというのを十分に考えなくてはいけないと思う。例えばさいたま市あたりで9月の中旬ぐらいでというのを提案する。テーマは需要と供給。

(木元座長)

- ・ タイトルというか、テーマをどうするかというのは、その時点にならないと、停電問題の場合でもまだ不確定要素があるだろうから、それをなるべく押さえてはいくにしても、そのものずばりではなく、もっと大きいところで考えるという方向ではないかと思っている。

(中村委員)

- ・ 9月中旬というのは物理的に難しいと思う。8月入ったら参加募集をしなければいけない。そのときにどういうテーマがふさわしいか決めるのは難しい。

(小川委員)

- ・ 後半でもいいですが、9月中が良いのではないかと思う。確かに、高木委員が言われたように、10月になると秋風が吹いてきて、喉元過ぎればという感じになる。

(木元座長)

- ・ 喉元の問題をやるのか、需給のような大きな問題をやるのかによって違うと思うが。

(吉岡委員)

- ・ そろそろ席を立たなければいけないので、一言だけ言わせていただくと、1回は政策論をやってみたいと思っており、松田委員が不満に思ったのも恐らく政策論という点ではあまり敦賀では議論されなかったという、そういうことも含めて感想ではなかったかと私は解釈している。人数をたくさん呼ぶと政策論というのはきちんとやれないという問題はあるが、やるべきだと思う。一つは予算というのは私にとっても物すごくおもしろい問題で、原子力予算とは何ぞやということを1回はやってみたいと思う。その際にはある程度勉強してこられた方を中心にということになっても、それは構わないと思う。電力需給も同じような意味でかなり重要であって、私は個人的には9月に専門的な研究会で、エネルギー安定供給と原子力発電というワークショップをやるのだが、安定供給とは何かについて、東電の不正事件及びその後の動きから見て、今までの考え方をかなり考え直さなければいけないのではないかという格好のケースであると思う。安定供給性を高めるというのは具体的にどういう方策を行えばいいのかというのも、非常に多くのメニューを設けて、それを一つ一つ議論するとおもしろいテーマだと思うが、それについてある程度政策論という方向でまとめるというのは長持ちする話題だ。たとえ寒くなってもそれはホットな話題で、皆さんの関心は熱いのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ そうすると、それはいつごろの開催がよろしいか。

(吉岡委員)

- ・ 現実的には9月下旬以降だろう。

(木元座長)

- ・ 小沢委員、お聞きになっていて次のステップについて、ご意見いただければ。

(小沢委員)

- ・ いつも立地で、消費地で、立地で、消費地でと言うけれども、立地と消費地というふうに考えていいのかどうか、ちょっとまとまらない。

(木元座長)

- ・ 例えば、今の電力の需給関係の問題を含めてやるというのはどうか。

(小沢委員)

- ・ どういうふうにやるのか。

(木元座長)

- ・ 今、吉岡委員が最後に言われた電力の安定供給と俗に言われている、安定供給というのは何なんだろうかということ。

(碧海委員)

- ・ 需給の問題を取り上げたときに、市民が参加するためにどうしたらいいのかと、私もまだ思いつかない。市民参加をどうしたらよいか。

(中村委員)

- ・ 専門家として議論したいという吉岡委員の気持ちはいつも分かるのだが、結局前回の議事録とこの辺から僕は同じことを言うことになるが、コアメンバーでもいいし、この市民参加懇談会でも良いが、この委員会として何を聞きたいのかというのが優先順位のトップなわけである。それがテーマにならなければいけないので、議論をしたいから場を作るというのではないと思う。
- ・ では何が聞きたいのかというと、本当に埼玉なのかという点が若干違うと思う。小沢委員、例えば今聞くとしたら何を聞くべきだと思うか。考えるのはそこだろう。

(小沢委員)

- ・ 先ほど高木委員が言った、探るということではないが、いろいろな意見を聞くことが趣旨だろうといった点で言うと、立地でやったから今度は消費地へ行って、消費地で話を聞くというのとは少し違うような気がする。

(中村委員)

- ・ そういう形は全然関係ないと思う。

(小沢委員)

- ・ 政策論議と言われると、学者や何かは何か知っているけれども、他の人は何も知らないのだからこの際というところがあって、それはどこか別のところでやっていただきたい。長計でも何でも。市民参加懇談会は人の意見をきちんと聞こうということで始まったのだから、私は先ほど自分は参加しなかったが、敦賀での懇談会についての反省会を、初めておもしろく聞いていた。いつもうまくいった、うまくいったと言っているから、ああ、よかったと、あ、そうと、一座の方ご苦労さまでございますという感じで聞いていたが、今回は何かあったらしいと、当事者じゃない役人がしゃしゃり出てきて困るとか、失礼だとか、ないがしろにされたとか、そうするとそれをめぐって一体それは何だったのかという話になって、初めて少しここでやろうとしているこ

との端っこに触れたと思う。予算の話でふと気がついたが、私はこの懇談会の予算は知らない。この懇談会の予算が幾らなのか、この集まりに予算が幾らかかっているのかも私たちは知らないでやっている。幾らかかっているのか少し聞きたかった。

(松田委員)

- ・ 私たちはもちろん交通費は出してもらっているが、何かお金もうけに来ているようなイメージで思っている人がいて、幾らぐらい出演でもらっているのか、というような話が出ていたりする。全くボランティアと思っている。交通費はもらっているからしようなが、お金が欲しくてやっているわけではなくて、私たちも原子力のことを本当に考えてこちらに来ているんだということがまだ伝わってないというところがあって、予算は公開すべきだと思った。
- ・ もう一つ虚しかったのは、幾ら私たちが真剣に議論して賛成だ、反対だ、心配だというふうに言っている、政策そのものは変化なしにどんどん、どんどん動いていっている。このギャップを私はつくづく感じている。幾ら市民の方たちが現場であれだけ真剣になって、敦賀で議論しても、議論したことと政策の動きというのは全くかけ離れていて、私たちの努力は無駄遣いされているような気がしてくる。政策の中に市民懇の議論が反映されるような市民参加懇談会のあり方というのをしっかりとしていかないと、単に意見を聞きましたという話で終わってしまうのではないかと。敦賀に行って初めて分かったというか、そのことに気づいた。この懇談会に何回か参加してみて、それをつくづく今感じている。ある意味ですごい市民の議論の努力の部分と政策の動きとの乖離した部分をどうすればいいのかしらと悩んでいる。

(新井委員)

- ・ さいたま市というのは私もおもしろいと思う。私の知識の範囲だから、あるいは間違いがあるかもしれないが、多分電気の自給率が一番低い県ではないかと、2%ぐらいかそれ以下、もちろん送電もあるので、そういう意味での重要性があるから、別に埼玉県の人が悪いというわけではないが、電源の問題を取り上げる意味合いでは、ここでやるというのは結構おもしろいのではないかなと思う。構成的には、電源的には消費地としても最大消費地みたいなものだから、そういう意味でそれを電源立地のところの問題を考えるという場所としては非常にふさわしいところだと思う。

(中村委員)

- ・ 埼玉だけが、ほとんど送電だけの消費地だと思う。

(木元座長)

- ・ 例えば埼玉でやるという場合には、どのような形でテーマをぶつけるか。

(新井委員)

- ・ 先ほど停電の問題が出たし、原子力に限って言えばまさに原子力の立地で私どもが記事を書いても必ず出てくるのは、消費地において安穩たる原稿を書いてどうなるんだということである。そのところはそんなに簡単に埋まる話ではないと思うが、「思いを致す」というのはちょっと抽象的な言葉で感傷的で嫌な言葉であるが、それ以外ないというところもあるわけなので、それを触発するような意味でもそういうところでやって、その市民なり何なりがこの問題をどう考えるかというのは、考えてもらうだけで私はそれなりの意味があると思う。

(木元座長)

- ・ 例えば元新聞社というお立場で考えると、どういうキャッチコピー的なテーマがあるか。

(新井委員)

- ・ そこまではぱっと思いつかない。電気については、埼玉の市民が自分たちで実際に作っていないものだが、東京も相当少ないわけだから、埼玉が特別悪いとか何とか、そういう意図とは違うが、消費者がどうしてもという形で今回の問題なんかを受けとめればいいのかというのは、本当によく考えておかないといけない最大級の問題の一つなのではなかろうかと思う。上手い方法があったり、何か明確なことが言い切れるというようなこととは少し違うのだが。

(木元座長)

- ・ なかなかまとまりにくいけれども、ある大きい意味での方向性が出てきているという気がしないでもないが、今埼玉というのが具体的に挙がった。埼玉で開催するということはどうか。テーマはまだわからない。

(中村委員)

- ・ 場所ではなくてテーマだろう。

(碧海委員)

- ・ それはそうだが、埼玉でやると参加者が今までと少し違った層に期待が持てるのではないかと思う。今は少し埼玉県はもめているけれども、割に若いごく普通の住民が東京よりもむしろ多い。だから、若い層のごく普通の市民をもう少し集められるのではないかという期待はある。

(木元座長)

- ・ 小沢委員は埼玉のことは良くご存知だと思う。

(小沢委員)

- ・ 場所よりもテーマが問題だろう。

(中村委員)

- ・ テーマだと思う。

(碧海委員)

- ・ テーマはN I M B Y (Not In My Backyard) との絡みで、とにかく自分たちは受けるだけ、少なくとも電力について埼玉なら埼玉の市民はお金では貢献している。きちんと税金も払っている。しかし、エネルギーについてあまり貢献しているという感じはない。

(木元座長)

- ・ エネルギーについての貢献というと、発電所があるかどうかという意味か。

(碧海委員)

- ・ そういうことになる。

(木元座長)

- ・ よその地域の発電で自分たちが暮らしているという、極端に言えばそういう意味か。

(中村委員)

- ・ テーマと言っている意味は、市民参加懇談会として何を聞くのかということ。我々の役割というのは明白である。市民の皆さんの声を聞いて、何とかそれを政策のプロセス段階から反映しようということである。我々としては主体的に何を聞きたいのかと

いうことがなければ、それは埼玉だ、横浜だという話ではないと思う。首都圏で今確かに節電問題、停電問題、需給の問題があるが、あるいは事業者との信頼関係とか——元々なかったと碧海委員は言っているけれども——確かにそういうテーマもあるが、それが本当に今聞くべきテーマなのかどうかということについて、私は必ずしもそうだとは思っていない。それで、前回のコアメンバー会議から同じことを言っているのだが。

(碧海委員)

- ・ 最終的にとにかく怖いものは嫌だと皆が言い続けていたら、廃棄物の処理から何から含めて原子力はある程度得ないと思う。怖いものは嫌だということからもう少し進めるのかどうかということだと思う。一步を踏み出せるかどうかという、その一步を踏み出すのに一体何が材料になるのかと、だから私は電力の需給の問題も一つ取り上げてもいいといつでも思っている。それが一つのきっかけにはなるのではないかと、非常に難しいが、そういうふうと思う。

(小沢委員)

- ・ 需給とは、どういうふうに言うのか。例えば、テーマにしてみたときにどういう言い方になるのか。「電力の需給をめぐって」などと言っても分からない。

(碧海委員)

- ・ そんな言葉を使ったら全然ぴんと来ない。でも、今、東京電力の停電は起きなさそうだという話もあるが、新聞等を見ていて気になるのは、例の全国の他電力からの融通というのが時々取り上げられて、そういう融通がうまく、あるいは量がうまく確保できるなら、原子力がなくても良いというような、そういう意見もあるというような記事も既に出始めている。電力の融通というのは一体どういうことなのかと一般の国民はそれでは分かるかという、十分には分からないと思う。分かっていない。「何か電気は送ってもらえるそうよ」と、「だから原子力なくてもいいんじゃない」と。

(木元座長)

- ・ 電力の融通は90万kWの枠があり、50Hzと60Hzの変換をもっと増やしてくれればというところまで分かっている、というところだろう。今までのお話を伺っていると、需要者側の意識だが需要という言葉ではなく、テーマとしては電力の供給の形、何によって電力を作っているかという方向に行ってしまうのではないか。

(小沢委員)

- ・ 「なぜ停電は起きたのか」、でなかったら「なぜ停電は起きなかったのか」とか、そのどちらかだろう。

(碧海委員)

- ・ それはいいかもしれない。

(中村委員)

- ・ どちらでもよろしいが、そのテーマで市民から何を聞くのか。

(小川委員)

- ・ 初めから発言すべき意見を持ってない市民に情報を提供して、そのときに感じたことを聞くということでも良いのではないか。埼玉の方々は立地点ではないし、そして何となく電気を使っている人たちである。だから、あまり電気に対する意識がないと思う。何を聞こうとこちらが耳をそばだてても、何も情報がないから言うこともないと

思う。だから、先ほど松田委員が言われたように、知らない方々に少し情報を提供する、そういう場、半分はその場でもいいような気がする。

(中村委員)

- ・それが市民参加懇談会の役割なのかと最初から疑問を呈している。それは資源エネルギー庁か何かがやる話ではないのか。

(碧海委員)

- ・そうではなくて、今年は少なくとも東京電力の不正記載問題があった以降、いつもの年に比べればはるかにたくさんの情報が少なくとも提供されたわけである。だから、埼玉の市民に一体そういうものから何を得たのか、知ったのか、あるいは非常に不満を感じたのか、そういうことを聞くことはできる。

(小沢委員)

- ・それは、電話を500台ぐらい用意して、オペレーターを用意して、アルバイト雇って聞けば分かることだろう。

(碧海委員)

- ・それでは止揚がないから、アウフヘーベン（止揚、調和統一）がないから、ただ電話をかけて一方的に聞くのと、市民参加懇談会は違うと思う。

(小川委員)

- ・資源エネルギー庁がやる情報提供と市民参加懇談会の場で市民と相対して行う情報提供は、少し違うような気がする。情報は全部役所がやれば良いというものでもなくて、市民参加懇談会だからこそ、深く通じる情報もあるのではないか。

(木元座長)

- ・言われる意味は分かるが、市民参加懇談会の中でこれだけコアメンバーがいれば、結果として情報の提供になるだろうと思う。しかし、それを前面に押し出すことは違うと思っている。参加していただいてご意見をいただくわけだから、電力の今回停電しなかった、あるいはしたという、電力とは何だったのだろうというような観点ではご意見が出ると思う。「私はどうしても電気が欲しかった」とか、「本当はこんなに電気は要らないんだ」と、「ましてや原子力で発電しているなら要らない」というご意見があるかもしれない。
- ・そうすると、電力の供給の形と先ほど申し上げたけれども、電力というのは何を利用して作れば良いのかというご意見が出るかもしれない。風力とか太陽光とか出るかもしれない。そういうことを論じていけば、原子力も結果として見えてくるだろうと思う。あからさまに原子力はこうだという情報を提供するのではなくて、結果として情報の提供になれば良いと私は思う。そういう形で進行していくためのテーマ、題は何かあるか。

(中村委員)

- ・現実的なことを言うと、第1部の形式はパネルディスカッションで良いとして、首都圏でやるときには小川委員の言う、ある程度の情報提供に値するような情報とともに情報の見方を提示するとなると、そのためには、はっきり言って誰もが話を聞いてみたくなるようなパネリストを選定して、碧海委員が期待するある程度若い世代の人もこの人の話だったらどういうテーマでも聞いてみたいというような人をパネリストに選べば、会場の皆さんにある程度情報も吸収してもらい、きっかけも得てもらって、

どう感じたか、どう感じているかということを第2部で聞くという方式は現実的にはあると思う。第1部の人選が最重要。この人の話なら聞いてみたい、この人の顔なら見てみたいという人をパネリストにすることができるかどうか、ほとんどかかっている。

(木元座長)

- ・ 例えばどういう人か。

(碧海委員)

- ・ 中村委員が言われたのは説明する側か、それともパネリストか。

(中村委員)

- ・ 説明については、前回の議事録を読んでいただければ分かるが、説明させる気はなかったわけである。一緒に話を聞きなさいという意味で、関係省庁や事業者に出てきてくれと言ったつもりだった。その趣旨は変わってないので、説明役ではない。

(碧海委員)

- ・ パネリストということであれば、ここでお名前を挙げて良いか分からないが、例えば神津十月氏はいかがか。とにかくご本人がエネルギー等に相当関心がある。

(中村委員)

- ・ 今ここでお名前を出すのは控えるとして、科学技術の背景を持った今ものすごい人気のある若手の推理作家の方とか、今言われたような女性のなかなか鋭い社会的発言をされているエッセイストの方とか、あるいは見方を全然変えて、場合によっては「節電隊長」の方とかは候補として考えられると思う。考え方として、それぐらい広げて人気のある方の人選を考えて、それだったら今年のこの電力状況を考えることをテーマにしても良いと思う。「なぜ停電は起きなかったか」でも良いし、「なぜ停電は起きたのか」でも良い。それで、需給の話というか、消費者というのは何なんだと、電気というのはどこでどうやって我々のところへ来ているのかという話ができるのではないか。首都圏でやるならこの方式だと思う。

(碧海委員)

- ・ 東京ビッグサイトのときは相当な人数が集まったのではないか。

(木元座長)

- ・ 2002年2月9日資源エネルギー庁の「エネルギー・にっぽん国民会議 in 東京」。1500人以上集まったと聞いている。

(碧海委員)

- ・ 埼玉は結構な人数は来ていただけたと思う。

(中村委員)

- ・ ビッグサイトは木元座長を初め石原都知事、平沼大臣らが出演していた。そういう意味では私が言ったのと同じような意味で、人気がある人たちが意見を言うのを皆さんが聞きたかったわけである。それがないとだめだということ。

(碧海委員)

- ・ それは必要だとは思う。

(木元座長)

- ・ しかし、あのイベントは年に1回か2回で、コマーシャル、電車の中張り広告、新聞広告を使うなど、かなり余裕を持って開催された。

(碧海委員)

- ・ 私たちも今ある調査に取りかかっているが、女性対象のその調査が8月の末に集計することになっているから、そういうものの結果だとか、停電関係の調査をやった会社もある。そういう調査の対象になった人たちに案内を出してもよろしいかと思う。

(木元座長)

- ・ 後で具体化してきたらそういうご意見は伺わせていただくとして、まとめてみたい。今何となく埼玉気分になっているが、埼玉がよろしいか。

(松田委員)

- ・ パネリストを少し…。

(木元座長)

- ・ 場所だけまず、伺いたい。テーマとかパネリストとか場所とか、全てリンクした上でやっているが、仮に埼玉とした場合、それでよろしいか。

(松田委員)

- ・ よろしいと思う。

(碧海委員)

- ・ 私は賛成である。

(木元座長)

- ・ 会場はその収容人数によって考えることにしたい。大体これまでは250人ぐらいの規模だったが、大体そのくらいでよろしいか。

(小川委員)

- ・ 250人ぐらいが良いと思う。皆さんが発言しやすいと思う。

(木元座長)

- ・ 時間帯は、これまでは昼間だったが、昼間でよろしいか。一般参加される方は、働いている方は来られないとか、以前いろいろな意見もあったが、やはり13時半とか14時あたりに開始するということ。

(中村委員)

- ・ そうすると、ウィークエンドになるかと思う。土曜日の午後か。
- ・ 埼玉だと、大宮あたりで働いている人が来てくれるのか、埼玉在住で東京に働きに行っている人が来てくれるのかによって、東京に働きに来ている人だったら平日午後6時なんてとても無理だろう。その時間ぐらいに東京を出るという感じになる。

(碧海委員)

- ・ だからやはり土曜日がよろしいのではないか。

(木元座長)

- ・ しかし最近は、土曜日・日曜日というのは家庭の日になってしまって、あまり人が集まらない様に思う。

(碧海委員)

- ・ 土曜日なら良いかと思う。

(小沢委員)

- ・ 浦和以南の人は大宮へは行かない、北上しないという特徴があると思う。東京に南下はするが、北上はしない。

(木元座長)



- ・ 土曜日というのはいかがか。  
(小沢委員)
- ・ どうだろうか。土曜日は最近は人がいっぱいいる。子供連れがたくさんいるから、行くかもしれないが。  
(碧海委員)
- ・ ほかの催しも土曜日は多い。  
(小沢委員)
- ・ 大宮でやると浦和の人は行かない傾向がある。  
(中村委員)
- ・ 逆に浦和でやったら大宮の人は行かないのではないか。  
(小沢委員)
- ・ 浦和でやると大宮等からは南下するが、北上はしないという不思議な傾向があるように思う。  
(木元座長)
- ・ 場所は埼玉にして、大宮か浦和かで少し考えることとしたい。
- ・ 時期はどうするか。先ほど出た9月の終わりから10月の中旬ぐらいを目処に考えて、一応、土曜日午後ということになるか。  
(中村委員)
- ・ 埼玉で平日午後というのは良くないと思う。  
(木元座長)
- ・ 平日の昼間は考えにくいということか。  
(中村委員)
- ・ どうだろうか。どういう人が来てくれるか。  
(碧海委員)
- ・ 私は土曜日午後が良いと思う。  
(木元座長)
- ・ 一応土曜日午後でよろしいか。今から当たると会場の都合もあり、ふさがっている可能性もあると思う。  
(松田委員)
- ・ このごろ学生が結構エネルギーに関心があるから、大学の学生だって午後なら来られるだろう。  
(木元座長)
- ・ テーマは先ほど小沢委員が言われた「なぜ停電は起きたか」、あるいは「なぜ停電は起きなかったか」に、副題を考えたい。
- ・ 人選については、当コアメンバー会議の中の人選ということがまずあり、第1部、第2部という構成でやらせていただくことにして、先ほどご提案があったように、募集をかけるときにご意見を集め、それを元にして展開していくという手法をとらせていただきたいと思うが、まずはやり方としてよろしいか。
- ・ これまでは第1部はずっと中村委員にお願いしているが、今回実は高木委員からご提案があったから、高木委員があいている日に合わせて、お願いできないかと思っている。

(高木委員)

- ・ 10月だと都合をつけるのは無理である。

(木元座長)

- ・ 9月ならよろしいか。

(高木委員)

- ・ 9月ならまだ大丈夫だが、10月だったら残念ながら無理である。9月も20日は都合が悪い。

(木元座長)

- ・ それでは、埼玉に関係のある方ということで、小沢委員はいかがか。

(小沢委員)

- ・ それは無理。申しわけないが、皆様の前でお断りしておく。

(木元座長)

- ・ ぜひお願いしたいと思っている。

(小沢委員)

- ・ 私は埼玉に賛成していない。先ほどから埼玉に相当私は疑問を呈している。どうして埼玉なのかと。でも、松田委員を始め、皆さん良いと言うから、皆さんがそう言うならいいかなとは思っているが。

(木元座長)

- ・ なるべく今までやってない方に参加していただきたいし、司会もやっていただきたいと思っている。

(小沢委員)

- ・ いやいや、手慣れた人の方がよろしいと思う。

(木元座長)

- ・ 小沢委員は外でいろいろやっていらっしゃって、手慣れている。

(小沢委員)

- ・ 私はだめである。説明会とかでやるのは好きだが、市民懇は難しそうで、向かない。

(木元座長)

- ・ そう言わず、お願いしたい。

(小沢委員)

- ・ 好きなようにやっていただければ。

(木元座長)

- ・ 司会などの候補はこれからお願いすることが皆様方にあると思うので、よろしく願いしたい。その前に第1部、第2部に分けることでよろしいか。

(中村委員)

- ・ 私も埼玉開催は特別賛成しているわけではないが、首都圏でどうしてもやるというなら、とにかく第1部の人選にかかっているの、司会もさることながら、それ以上にパネリストの人選、それに尽きる。

(木元座長)

- ・ 第1部、第2部と分けて、第2部の司会は順番にという方法をとっていたが、1人だけをお願いするかもしれない。司会を1人で全部通すのも一案だと思っている。

(碧海委員)

- ・ 第1部のパネリストを、必ずしも今までのような形ではなくて、もう少し情報提供型の部分を強くした方が良いという気がする。というのは、私は東京電力の仕事を20年間やっていたからよく知っているが、とにかく電気については知られていないわけだから、情報をきっちり伝える必要はある。それは何も押しつけではなくて、もっと客観的な情報を。そういう意味で情報提供者としての第1部のパネリスト、これは落とさないようにした方が良いという気がする。

(小沢委員)

- ・ 吉岡委員は理工系だからよろしいのではないか。

(中村委員)

- ・ それは座長報告との関係もあり、もう少し慎重に考えた方が良いと思う。また、あまりレクチャー（講師）風に情報提供をするパネリストだと、聞いている方がおもしろくないと思う。だから、冒頭の座長報告で、背景は説明できるのではないか。古い火力発電所の尻をたたいて発電しているのだという話等は。

(木元座長)

- ・ いろいろなことを踏まえて、状況の報告は簡単にできるが。

(中村委員)

- ・ 座長報告と、パネリストからも少し。両方である程度事実、情報提供とか、考え方の提供はできるというスタンスでよろしいのではないか。

(木元座長)

- ・ そういう形にして、キャスティングの方はこれから皆様のご意見を踏まえた上でリストアップしてみたい。

(碧海委員)

- ・ 例えばの話、1軒、1軒の家庭に届けられる「電気の使用量のお知らせ」というのがあるが、あれは家庭で使われる電気に関して、いわば唯一の情報である。それでは、あの領収書を兼ねている使用量のお知らせ、あれに書かれていることのすべてをきちんと分かっているか。あれを知るだけでも相当なことが分かる。

(小沢委員)

- ・ 基本料金が高いとか。

(碧海委員)

- ・ 例えば家庭用が何で電灯契約になっているとか、そういうことも含めて、そういうなるべく身近なところから説明してくれるような最初の情報提供者をぜひ私は出してほしいと思う。

(木元座長)

- ・ それはもう少し検討する時間があると思うので、皆様のご意見をまた改めて伺いたい。
- ・ 今日はもう、あまり時間がないので確認するが、今の段階では「なぜ停電は起きなかったか」、あるいは「なぜ停電は起きたか」をテーマに掲げるとして、第1部、第2部に分けて、第1部の方は皆さんが関心を持つような方をパネリストとしてお招きする。その中には、碧海委員、小川委員が言われたように、ある程度の情報提供的な話に対応いただける能力のある方を考えようということになる。第1部、第2部の司会の方はこれから追って考えたい。

- ・ 新井委員には初めてご参加いただいたが、こういう形でコアメンバー会議をやらせていただいているので、よろしくお願いしたい。何かご意見あれば。

(新井委員)

- ・ 意見ではないが、なかなか激しいものだというふう感じた。私はたじたじだった。

(木元座長)

- ・ 今日はこれで終わりたいと思う。

(小沢委員)

- ・ そういえば、竹内委員は、1月のコアメンバー会議で日本原燃のプール漏水について、3月頃には直って長期的な工程は崩さないとおっしゃっていたが、まだ稼動していない。訂正していただけなかったのは心外である。

(竹内原子力委員)

- ・ 新聞発表等があったし、もう少しお会いする機会があったら良かったとも思うが、お言葉は受けとめる。

(小沢委員)

- ・ 「あのときこういうふうに言ったが、あれは実はこうだった」と言っていたけると、ああ、そうですかと思う。今日の議論は激しいから、激しいついでに、一言申し上げた。

(木元座長)

- ・ 何かあったらご連絡するようにしたい。
- ・ 次回もご出席を楽しみにお待ちしております。

### (3) その他

○次回のコアメンバー会議は8月下旬頃に実施する様、調整することとなった。

○本日の議論を踏まえて、事務局で市民参加懇談会の開催計画案を作成し、後日、FAX等で各委員にご意見を伺った上で、次回コアメンバー会議にて検討することとなった。

以 上